

令和の日本型学校教育に求められる教師の ファシリテーション能力についての一考察

—学校教育でのファシリテーション・サイクルを目指して—

A Study on the Facilitation Skills of Teachers' as Required in Japanese-Style School Education in the Reiwa Era:
Aiming for a Facilitation Cycle in School Education

工藤 亘
Wataru Kudo

キーワード：ファシリテーション能力、ファシリテーション・サイクル、支導、学級ファシリテーター

1. はじめに

令和3年1月26日に文部科学省中央教育審議会は『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して—全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現—（答申）』を公表した。（以下、令和3年1月26日中教審答申と記す）その第I部総論1.急激に変化する時代の中で育むべき資質・能力において、以下のように示している。

一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている¹⁾。

さらに2020年代を通じて実現すべき令和の日本型学校教育の姿において、「全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」²⁾を目指すとしている。個別最適な学びとは、「個に応じた指導を学習者視点から整理した概念」³⁾である。

そして個別最適な学びが孤立した学びに陥らないように、「子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者の価値ある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する『協働的な学び』を充実することも重要」⁴⁾であると明示している。

また、Society 5.0時代における教師及び教職員組織の在り方についての（1）基本的な考え方では、教師に求められる資質・能力を「使命感や責任感、教育的愛情、教科や教職に関する専門的知識、実践的指導力、総合的人間力、コミュニケーション能力、ファシリテーション能力など」⁵⁾と示している。全ての子どもたちの可能性を引き出し、個別最適な学びと協働的な学びの実現を目指すにあたり、「ファシリテーション能力」が追記された点に本研究では着目する。

日本経済団体連合会(2020)は「Society 5.0に向けて求められる初等中等教育改革 第二次提言」において、STEAM教育や探究型学習を進めるにあたり教師には「ファシリテーターとして授業を組み立てる能力」⁶⁾が必要と示している。また全国の教員養成課程において、児童生徒の能動的な学びを促進させるためにも「教

員を志望する学生がファシリテーションやICT及びEdTechを活用した指導法、グローバル教育を学べるようにすべきである⁷⁾と指摘している。従来の知識・技術伝達型の学校教育では、21世紀を生きていくために必要な力、生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力の育成が困難という視点から、主体的・対話的で深い学びの重要性が謳われたのである。

平成27年12月21日の文部科学省中央教育審議会「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について一学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて一（答申）」において、これから教師に求められる授業力の観点を以下の通り示している⁸⁾。

- i) 習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているかどうか。
- ii) 他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できているかどうか。
- iii) 子供たちが見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているかどうか。

以上の三つの観点を踏まえ、主体的・対話的で深い学びの実現のためには、学校と教師の創意工夫に基づく指導法の見直しが必要である。現行の学習指導要領では授業を通し、子供たちが生涯にわたって積極的に学び続けることを目指している。前文では子供一人ひとりが持続可能な社会の担い手となることが明示され、環境や人権等の課題を主体的に考え、公正で持続可能な社会をつくるために行動する人の育成・開発が重視されている。

そのため教師には、従来の知識伝達型の教授法から子供が主体的に学び、行動を起こせるように伴走者として促進するファシリテーション能力も求められるようになったのである。

そこで本研究は、令和3年1月26日中教審答申において記された教師に求められるファシリテーション能力に着目し、①日本でのファシリテーター・ファシリテーション・ファシリテーション能力の研究動向やそれぞれの定義を概観する。そして②教育分野でのファシリテーション能力を整理したうえで、教師の養成・採用・研修の一体化を視野に入れ、学校教育でのファシリテーション能力の育成について提言することを目的とする。

2. 日本でのファシリテーター・ファシリテーション・ファシリテーション能力に関する文献研究の動向

表1は、国内の学術論文探索のCiNii Articlesにて論文検索のキーワードを「ファシリテーター・ファシリテーション・ファシリテーション能力」にし、さらに、それぞれのキーワードに「学校・教育・大学・養成・教員養成・開発」を加えて検索した結果である。(表1)

表1. ファシリテーター・ファシリテーション・ファシリテーション能力をキーワードとした論文検案件数

論文検索キーワード	件数	論文検索キーワード	件数	論文検索キーワード	件数
ファシリテーター	1050	ファシリテーション	1098	ファシリテーション能力	8
ファシリテーター 学校	92	ファシリテーション 学校	146	ファシリテーション能力 学校	1
ファシリテーター 教育	434	ファシリテーション 教育	421	ファシリテーション能力 教育	6
ファシリテーター 大学	551	ファシリテーション 大学	396	ファシリテーション能力 大学	3
ファシリテーター 養成	110	ファシリテーション 養成	19	ファシリテーション能力 養成	1
ファシリテーター 教員養成	2	ファシリテーション 教員養成	5	ファシリテーション能力 教員養成	0
ファシリテーター 開発	160	ファシリテーション 開発	120	ファシリテーション能力 開発	1

(2021年4月10日現在)

この結果から「ファシリテーター及びファシリテーション」についての研究が「ファシリテーション能力」の研究と比較すると顕著に多いことが分かる。換言すれば「ファシリテーション能力」についての研究は非常に限定的であり、今後の研究に余地があるともいえる。

また、「ファシリテーター及びファシリテーション」のそれぞれに追加したキーワードでは、「教育」と「大学」が顕著に多いことが分かる。このことから「ファシリテーター及びファシリテーション」に関する研究は、大学での取り組みや教育であると考えられる。

さらに「ファシリテーター及びファシリテーション」のそれぞれにキーワード「教員養成」を追加した検索結果は合計しても7件のみであり、「ファシリテーション能力 教員養成」では0件であった。

これらの結果から、教員養成を実施している大学においてファシリテーション能力の研究は未開拓であると考ええる。したがって令和3年1月26日中教審答申で教師に求めるファシリテーション能力は、教員養成段階での研究・開発が急務であり、教員養成系の大学では具体的な取り組みやカリキュラム、プログラム等を示すべきだと考える。

最も論文検索性件数が多かったキーワードの「ファシリテーション」について、研究動向を調べるために便宜上10年ごとの年代に分けて検索性件数を整理した。(表2)

表2. 10年ごとのファシリテーションをキーワードにした論文検索性件数

論文検索キーワード ファシリテーション	
年代	件数
1970	10
1980	7
1990	10
2000	331
2010	645
2020	86

(2021年4月10日現在)

この結果から、ファシリテーションをキーワードとした研究は2000年代から盛んになり、2010年代に急増していることが分かる。これは小峰(2021)が指摘する「日本では21世紀の到来とともにファシリテーションに注目が集まった」⁹⁾を支持するものであり、国立国会図書館リサーチでのファシリテーションをタイトルとした本も2000年以降に増加していることとも一致している。

その背景を学習指導要領の変遷(平成—令和)からみてみたい。1989年(平成元年改訂)では、思考力・判断力・表現力などを重視した新学力観のもとに社会の変化に自ら対応できる心、豊かな人間の育成が謳われ、1998年(平成10年改訂)では、基礎・基本を確実に身に付けさせ、ゆとりの中で特色ある教育を展開し、21世紀を切り拓いていく「生きる力」が具体的に定義された。また、1977年から使われてきた「ゆとり」という言葉の意味が、授業時間の縮小ではなく、問題解決や探究活動を主体的・創造的に取り組むための「ゆとり」へと変化した。

2003年(平成15年一部改正)では、学習指導要領のねらいの一層の実現と個に応じた指導の一層の充実が謳われ、2000年のPISAの結果から、家庭学習の時間が参加国の中で最低であることや、読解力が平均並みである等の課題が明らかになり、文部科学省は「学びのすすめ」を発表し、初めて「確かな学力」という言葉が用いられた。

2008年(平成20年改訂)には、生きる力の育成、基礎的・基本的な知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成のバランスが謳われ、ゆとり教育でも詰め込み教育でもない、生きる力の意味や必要性を強調した記述になっている。

また、2015年(平成27年一部改訂)では、情報通信技術の発展と子供の生活、地域や家庭の変化、いじめの本質的な問題解決等を背景として道徳の「特別の教科」化がされた。

更に、2017年（平成29年）では、情報化、グローバル化、人工知能が急激な社会的変化をもたらす予測困難な時代で、未来の創り手となるために必要な資質・能力を確実に育むことが必要という背景から「社会に開かれた教育課程」、「主体的・対話的で深い学び」等が重要視されている。

以上の変遷を経て、2000年代から新しい学力観をもとに「生きる力」の育成のためには、知識注入の詰め込み型の教授スタイルから児童生徒の主体性や創造性を引き出し、主体的・対話的で深い学びを促進するためにファシリテーション型スタイルが求められるようになったと考えられる。

令和3年1月26日中教審答申において、子供たちの可能性を引き出し、個別最適な学びと協働的な学びの実現を目指すにあたり、教師に求められる能力として「ファシリテーション能力」が追記され、重要視されることから今後は教員養成段階からのファシリテーション能力に関する研究・開発に力を入れていかなければならないと考える。なぜなら、教師のファシリテーション能力に関する定義やその育成法等が示されない限り、文言として「ファシリテーション能力」が必要と謳われるだけに留まり、具体的なファシリテーション能力の向上に結び付くことはないためである。

3. ファシリテーションの応用分野と定義の概観

ファシリテーションは、ビジネス・政治、社会活動・学術、自然・環境、生活、社会教育・学校教育、アート・芸能等の様々な分野で応用されており、定義も多様である。（表3）

1960年代ではグループエンカウンター等の体験学習が拡がり、それが教育系のファシリテーションとして現在まで続いている。同時期には、ワークショップや市民参加型のまちづくり活動へ拡大し、1970年代からビジネス分野で応用され始めている。特に21世紀に入った頃からビジネス界でも注目を集め、日本ではファシリテーションを専門的に研究する大学院の講座も開講されている。

表3. ファシリテーションの定義（抜粋）

ファシリテーションの定義	出所
直面する課題に対して、最大限の創造力、参加、コミットメントを引き出すことを目的として、グループのメンバーに方向性を示し、コミュニケーションを行うこと	Fran Rees 著、黒田由貴子、P・Y・インターナショナル訳『ファシリテーター型リーダーの時代』プレジデント社、2002年、p. 28
集団による問題解決、アイデア創造、合意形成、教育・学習、変革、自己表現・成長など、あらゆる知識創造活動を支援し促進していく働きのこと	堀公俊『ファシリテーション入門』日本経済新聞社、2004年、p. 21
グループにおける問題定義、問題解決、意思決定の方法を改善させ、グループの能力を高めるために行われるプロセス	Roger Schwarz 著、寺田真美、松浦良高訳『ファシリテーター完全教本—最強のプロが教える理論・技術・実践のすべて—』日本経済新聞社、2005年、p. 6
人と人との相互作用を活発にし、創造的なアウトプットを引き出すもの後に、集団の知的相互作用を促進する働き	森時彦『ザ・ファシリテーター—人を伸ばし、組織を変える—』ダイヤモンド社、2004年、p. iii
組織や集団による問題解決や合意形成、学習促進などのコミュニケーション活動において、創造・協働的な議論や話し合いのプロセスをデザイン・マネジメントすること	武田正則『教育現場の協働性を高めるファシリテーション実践学』学事出版、2011年、p. 4
対象（個人、対人間、チーム、組織）となるものが、直面しているさまざまな障がい（心理的、物理的）を、自ら取り除き、目標達成をすすめていけるように、援助促進すること	津村俊充、星野欣生編『実践人間関係づくりファシリテーション』金子書房、2013年、p. 2
集団に働きかけて、集団内の目的に向けた知的相互作用を促進し、成果をあげる活動	本山雅英『大学生のためのコーチングとファシリテーションの心理学』北大路書房、2014年、p. 73

以上のようにファシリテーションの定義は、応用分野や研究者によって異なる点もあり多様である。筆者は堀（2004）や森（2004）の考えを支持した上で、教育分野において「知的・情緒的相互作用を支援・促進する働き」¹⁰⁾（工藤、2011）をファシリテーションの定義とする。

またファシリテーションに関する先行研究では、ファシリテーションをリーダーシップに含まれる能力として捉えられている。（表4）

表4. リーダーシップとしてのファシリテーション (抜粋)

リーダーシップとしてのファシリテーション	出所
ファシリテーションがリーダーシップのスキルであることはまちがいない	Fran Rees 著、黒田由貴子、P・Y・インターナショナル訳『ファシリテーター型リーダーの時代』プレジデント社、2002年、p. 11
学校で一方的に知識を伝えるだけでなく、お互いから学び合うような体験学習や参加型学習の必要性を説き、教え指導するリーダーシップから、子どもたちの意欲や主体性を育み支援する新しいリーダーシップへの転換が迫られている	中野民夫『ファシリテーション革命—参加型の場づくりの技法—』岩波書店、2003年、p. 4
ファシリテーションがリーダーシップの現れである 教師はある時はファシリテーターとして支援的に関わり、またある時は強いリーダーシップを発揮することが求められる	堀公俊「教師のためのファシリテーション入門」『授業づくりネットワークNo.14特集リーダーとしての教師、ファシリテーターとしての教師』学事出版、2014年、pp. 19-20
ファシリテーションはリーダーシップ発揮のための中核となるスキル	グロービス著、吉田素文執筆『ファシリテーションの教科書』東洋経済新報社、2014年、p. 4
チームを率いて成果を生み出す、リーダーシップの一つのスタイル	谷益美『リーダーのための！ファシリテーションスキル』すばる舎、2014年、p. 37
リーダーシップ教育の王道は、受講者が自分でリーダーシップ行動を実施にとってみる→その行動について周囲の受講生や教員フィードバックを受け取る→フィードバックも参考に自分のリーダーシップ行動を振り返る→自分のリーダーシップ行動の改善計画を立てる→自分でリーダーシップ行動を実際にとってみる（以下繰り返し）というサイクルを作ることであるから、教員はそのサイクルをファシリテートするだけである	日向野幹也「新しいリーダーシップ教育とディープ・アクティブラーニング」松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター編著『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房、2015年、p. 246

筆者は、学校教育でのリーダーシップを「誰かのために行動し、何らかの影響を与えること」(工藤、2020)¹¹⁾と定義した。この定義に従えば、児童生徒もリーダーシップを発揮していることを自覚しやすくなり、リーダーシップ教育の促進につながると考える。そして教師もこの定義であれば、学校生活場面において多くの児童生徒のリーダーシップを発揮している場面を捉えることができ、同時に承認や支援が可能になると考える。

先行研究からファシリテーションはリーダーシップに含まれるため、児童生徒が誰かのために行動できるように促すことやそのための環境をつくるのが教師のファシリテーション能力でありリーダーシップでもあると考える。

4. 教育分野でのファシリテーターについての概観

ファシリテーションの応用分野が多岐にわたっていることは先述したが、ここでは教育分野に絞り、先行研究でのファシリテーターの役割について抜粋し整理する。(表5)

また武田(2011)は教師とファシリテーターの立場を整理し、「教師は学習プロセスと内容(コンテンツ)に関わるが、ファシリテーターは基本的に中立を保ちながら学習プロセスのみに関わり、内容には踏み込まない」¹²⁾と指摘する。(表6)

石川ら(2015)は、教師がラーニング・ファシリテーター(学習者の主体的な学びを促進する専門家)としてファシリテーションを学校教育に適用する技能を体系的に整理し、その中で従来型の教師とファシリテーション型の教師を比較している。(表7)

筆者は、教育分野でのファシリテーターを「参加者に直接的に指示を与え教え込む『指導』ではなく、参加者との双方向のやりとりを大切にして、個人やグループのプロセスに気づき、その状況を的確に判断し、個人やグループの能力を十分に発揮できるように支援しながら導き『支導』する人(支導者)」¹³⁾(工藤、2012)と定義した。

表5. 教育分野でのファシリテーターの役割（抜粋）

教育分野でのファシリテーターの役割	出所
学習のファシリテーターを学習をやりやすくする人とし、その役割は、学習者が表明するニーズに応じて学習者の成長と変化を励まし支えること	Patricia Cranton 著、入江直子、豊田千代子、三輪建二訳『おとなの学びを拓く―自己決定と意識変容をめざして―』鳳書房、1999年、pp. 104-105
学習ファシリテーターには、問題解決のためのマネジメントデザインと協働促進のためのコミュニケーションスキルが必要	武田正則「参画型協働学習におけるファシリテーションに関する理論的背景」教育情報研究第27巻第4号、2011年、p. 17
基本的に子どもと対等な位置を保ちながら、教室にいる子どもそれぞれの思いや活動を引き出し、子ども同士をコラボレーションさせながら活性化させていく役割	武田正則『教育現場の協働性を高めるファシリテーション実践学』学事出版、2011年、p. 5
常にどうすれば学習者の主体的参加―体験学習だけでなく、批判的思考を促すなども含まれる―を促すことができるかを考えることが、ファシリテーション型教師のあり様	三田地真美『ファシリテーター行動指南書―意味ある場づくりのために―』ナカニシヤ出版、2013年、p. 84
中立的な立場で各グループの思考プロセスを把握しつつ、各グループにおけるチームワークを引き出して、教科等の目標に向けて最大の力を発揮させるように支援すること	藤原大樹「アクティブ・ラーニングを支えるファシリテーション1―授業づくりの視点から―」高木展郎編著『「これからの時代に求められる資質・能力の育成」とは―アクティブな学びを通して―』東洋館出版社、2016年、p. 104
学級の支持的風土を高める工夫として①自由で楽しめる風土づくり、②安心で安全な風土づくり、③認め合う風土づくり、④高め合う風土づくりを挙げ、それによってアクティブ・ラーニングが促進されるとし、教師はファシリテーターとして気づき・分かち合い・練り上げを促す役割がある	犬塚文雄「アクティブ・ラーニングを支えるファシリテーション2―学級(H.R.)経営の視点から―」高木展郎編著『「これからの時代に求められる資質・能力の育成」とは―アクティブな学びを通して―』東洋館出版社、2016年、pp. 116-118
学習者が自らを省察し、他者を尊重する人間関係を構築することのできる「場づくり」を目指している アクティブ・ラーニングに取り組む教師が、どのような理念を持ち、どのように児童生徒と向き合い、寄り添うのが重要	山中信幸「ファシリテーターとしての教師の養成―豊かな心を育む生徒指導の実践者の養成に向けて―」川崎医療福祉学会誌Vol.27No.2、2018年、p. 269、p. 275
学び合いのために教師は子供の学びの促進役、つまりファシリテーターとして子供同士のやり取りを活発にすること 子供たちが学びを楽しむ、積極的に主張する、互いの意見を傾聴する、独自性や斬新さを認める、意見や考えの差異に正対する、自らの考えを生成する、仲間存在を大切に、自己変容に気づくことであり、そのためにも教師がファシリテーターとしての役割を果たしアクティブ・ラーナーである必要がある	田村学『深い学び』東洋館出版社、2018年、p.198、p. 242
子どもたちが自分で考え、ともに話し合い協力して課題の発見や解決に向けて取り組んでいくプロセスを支え、促進するのが教師の仕事とし、教師の役割がティーチングから子ども一人ひとりの資質・能力を最大限に引き出すファシリテーションに変化している	諸富祥彦『いい教師の条件―いい先生、ダメな先生はここが違う―』SBクリエイティブ、2020年、p.240

表6. 教師とファシリテーターの比較

項目	教師	ファシリテーター	
内容	教室環境（机配置）	孤立型	グループ型
	テーマ内容	結論がある	結論がない
	情報処理	アルゴリズム	ヒューリスティクス
	教師の役割	教える（プロセス+コンテンツ）	引き出す（プロセスのみ）
	教師の振舞い	表現力が大	あまり表現しない
	学習評価の観点	知識・技能	参画・協働・創造
	学習活動	習得型	活用・探求型
	化学反応	元素（酸素・水素）	触媒（白金黒）

出典：武田正則「ファシリテーター能力の育成のための校内研修モデルの開発―学習促進案（facilitation plan for learning）の提案―」日本教育情報学会第27回年会論文集、2011年、p. 47

表7. 従来型の教師とファシリテーション型の教師との比較

	従来型の教師	ファシリテーション型の教師
求められる教育形態	トップダウンの教育、ピラミッド型	ボトムアップの教育、ネットワーク型
学習内容と過程	知識や情報を与え、内容量をより充実させていく	予定していた内容とそれをきっかけとして気づく想定外の内容とがある
実践者の発言量	予定した学習内容を伝え教えることが重視されるため、発言量が多くなる	学習者同士で学びあう過程において引き出されるものもあるので、発言量は少なくなる
立ち位置	意見をコントロールすることで結論へ結びつける	学習者なりの結論にいたる案内をする
集団への介入	自分の力で場を盛り上げる	集団の力で場を盛り上げる
雰囲気づくり	結論ありきの空気が醸し出されるため、(反対)意見が言い出しづらくなる	全員の意見が尊重されるため、何を言ってもいい、安心安全な場が保証される
リーダーシップ	集団を先導するような力強さ	集団を活かすしなやかさ
参加感	発言できなかった学習者への対応が不十分になりがちで、疎外感を覚える	何かしら場に貢献できる存在として捉えられるため、「いてもいい」という安心感を覚える

出典：石川一喜、小貫仁編「教育ファシリテーターになろう！」弘文堂、2015年、p. 18

5. 教育分野でのファシリテーション能力に関する先行研究の概観

広範囲で多様に活用されているファシリテーションは、それぞれの分野で求められる能力が異なっている。たとえば、企業での会議等で求められるファシリテーション能力は「場のデザインのスキル、対人関係のスキル、構造化のスキル、合意形成のスキル」¹⁴⁾等であり、ワークショップで必要とされるファシリテーション能力は「先導のスキル、保持のスキル、介入のスキル、終息のスキル」¹⁵⁾等が挙げられている。

表8は、教育分野で求められるファシリテーション能力を先行研究から抜粋し、まとめたものである。(表8)

表8. 教育分野でのファシリテーション能力 (抜粋)

教育分野でのファシリテーション能力	出所
直接メンバーに指示したり、教え込んだりするのではなく、メンバーとのコミュニケーションを大切に、個人やチームのプロセスに気づき、そのデータを生かしながら、個人やチームの能力を十分に発揮できるように支援する能力	津村俊充・石田裕久編『ファシリテーター・トレーニング—自己実現を促す教育ファシリテーションへのアプローチ—』ナカニシヤ出版、2003年、p. 12
①場のデザイン、②対人関係、③構造化、④合意形成、⑤情報共有化	武田正則「ファシリテーター能力の育成のための校内研修モデルの開発—学習促進案 (facilitation plan for learning) の提案—」日本教育情報学会第27回年会論文集、2011年、p. 48
アクティブ・ラーニングで大切なのは、対話、グループ学習、討論といった学習活動の外形ではなく、授業において子供たちがアクティブ・ラーナーになっているかどうかだと警鐘を鳴らし、そのためには教師自身が教職のプロとしてのアクティブ・ラーナーになることが求められる	合田哲雄「これからの時代が求める資質・能力とは」高木展郎編著「『これからの時代に求められる資質・能力の育成』とは—アクティブな学びを通して—」東洋館出版社、2016年、pp. 12-13
教員養成の中でファシリテーションを学ぶ授業において、そのスキルとして「プロセス・デザイン、プロセス・マネジメント、傾聴や質問等のコミュニケーションスキル、ロジカルで構造化された議論のためのスキル、ファシリテーション・グラフィック、合意形成のためのスキル」等	竹林地毅「教員養成の授業がファシリテーションで変わる！」中野民夫、三田地真実編著「ファシリテーションで大学が変わる—アクティブ・ラーニングにのちを吹き込むには—」ナカニシヤ出版、2016年、p. 100
①自らの授業実践を客観的に俯瞰し、その授業実践の課程において、応答的にその都度変更し、修正する柔軟性をもつこと、②自らの実践を批判的に検討する自己省察力をもつこと、③授業実践が機械的に、また惰性的にならないように常に工夫すること、④公正な社会づくりに参加し、より望ましい社会を創造していく実践力を学習者に獲得させようとする意志をもつこと	山中信幸「ファシリテーターとしての教師の養成—豊かな心を育む生徒指導の実践者の養成に向けて—」川崎医療福祉学会誌Vol.27No.2、2018年、p. 274
学習者に添った学びの過程をデザインし、学習を補助・促進できる	高橋博美、関田一彦「教育ファシリテーションの実際と今、これから求められるもの—協同学習ワークショップの実践分析を通じて—」創価大学教育学論集第72号、2020年、p. 252
知識注入型の画一・一斉授業から個別最適化された学びへとシフトすれば、教師に求められるものも変わるとし、一斉授業をうまく回す力よりも、ファシリテーション力が求められる	平川理恵「学校教育の“今”と“未来”」教育の未来を研究する会「最新教育動向2021—必ず押さえておきたい時事ワード60&視点120—」明治図書、2021年、巻頭インタビュー

筆者は教育分野でのファシリテーション能力は、教育活動における指導法のティーチング⇒ファシリテーション⇒コーチングに関連すると考える。まずは「指導」によるティーチングで児童生徒に基本的な知識や考え方、行動様式や規範等を教え、そしてファシリテーションで思考や意欲を促進し、その後コーチングによって児童生徒の意見や考え等を引き出していくのである。このファシリテーションとコーチングを合わせた機能が「支導」¹⁶⁾であり、この指導と支導のバランスを見極め、当意即妙できる能力が教師に求められると考える。

6. 学校教育でのファシリテーション・サイクル

文部科学省総合教育政策局は「教師の資質能力の向上等について」（令和2年11月17日）において、「教師の養成・採用・研修の一体的改革」¹⁷⁾を明示し、養成段階の履修内容を充実させ、外国語教育・特別支援教育・ICTを用いた指導法や主体的・対話的で深い学び等の視点に立った授業改善に対応した内容を必修化している。

令和3年1月26日中教審答申で教師に求められているファシリテーション能力は、主体的・対話的で深い学びとの関連性が特に高いと考えられるが、「ファシリテーション」に関連する科目を開講している大学は限定的である。

例えば立教大学・法政大学の「ファシリテーション論」、星槎大学の「ファシリテーションの基礎」、日本福祉大学の「国際ファシリテーション演習」、南山大学の「体験学習ファシリテーション基礎研究」等がある。また大学院では南山大学の「教育ファシリテーション論・教育ファシリテーション評価研究」、産業能率大学の「ファシリテーションスキル」、早稲田大学の「ビジネスファシリテーション」等がある。しかし、主体的・対話的で深い学びを促進するためや教員養成を主眼として開講している科目は非常に限定的である。

以上の現状からは、教師に求められているファシリテーション能力の修得は容易ではないと考える。しかし教員養成に注力している玉川大学は、2017年度より教員志望の有無に関わらず全学部の学生が「TAPファシリテーター資格」を取得できるように科目（TAPファシリテーションⅠ：2単位、TAPファシリテーションⅡ：2単位）と条件を設定し実施してきた。特に主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業としてこれらの科目と内容は対応している。

2020年度には、学生の履修状況を鑑みて条件を整備し、資格名を「TAPリーダー資格」に改めて現在に至っている。資格の取得要件はTAPファシリテーションⅠ（2単位）とTAPファシリテーションⅡ（2単位）を修得し、資格試験に合格することである。

また玉川大学大学院では、2020年度から「学級ファシリテーター資格」を取得できるように科目を新設した。学級ファシリテーターとは、教師が一方的に主導性を発揮する指導ではなく、子どもを支えながら導く支導（ファシリテーション）ができる教師を指すのである。

学級ファシリテーター資格は、子どもの主体的・対話的・深い学びを促進するために、①子どもの考えや判断を待ち、子どもの発言や試行錯誤を促進する環境づくりができる、②ティーチング・ファシリテーション・コーチングの違いを理解しファシリテーターの役割を理解している、③集団の発達、目標設定と振り返りの方法、ルールとリレーション、体験の量と質等を理解している、④学級マネジメントやプログラムデザインができる等の能力を有している者に与えられる。学級ファシリテーターの資格取得に必要な科目と条件は「ファシリテーターとしての教師の技術と実践A」（2単位）と「ファシリテーターとしての教師の技術と実践B」（2単位）の合計4単位を修得したうえで、学級ファシリテーター資格のための試験に合格することである。

以上のように、大学や大学院での教員養成の課程内でファシリテーションの基礎的な理論と技術を学び、授業内での演習や部活動、インターンシップや教育ボランティア等においてファシリテーションを試みる経

験の積み重ねが重要である。

堀（2004）が「ファシリテーションの技を身につけるのは体験から学ぶしかなく、実践経験を積むことが唯一の上達の方法」¹⁸⁾と指摘した通りに、ファシリテーターとしての実践が必要である。そしてファシリテーションの実践後には振り返りを行い、良質なフィードバックを受け、それを基に自身の学習に結び付けることでファシリテーション能力が向上するのである。

筆者は、このような経験を積み重ねたうえで教師として採用され、さらには法令研修や校内研修等を通じて適切なフィードバックを受け、ファシリテーションの理論と実践を往還・統合することで、教育活動の全般を通じたファシリテーションが可能になると考える。

そうした教師によるファシリテーションを授業や教育活動の中で児童生徒が体験的に学ぶことにより、教師がいない場面でも児童生徒同士がファシリテーターとなり、協働的な学びや主体的・対話的で深い学びにつながると思う。この経験や過程を経た児童生徒の中から教師を志し、ファシリテーションを学べる教員養成系の大学に進学することでファシリテーション能力を備えた教師につながっていくと考えられる。こうした学校教育でのファシリテーション・サイクルを整える体制や仕組みが必要である。（図1）

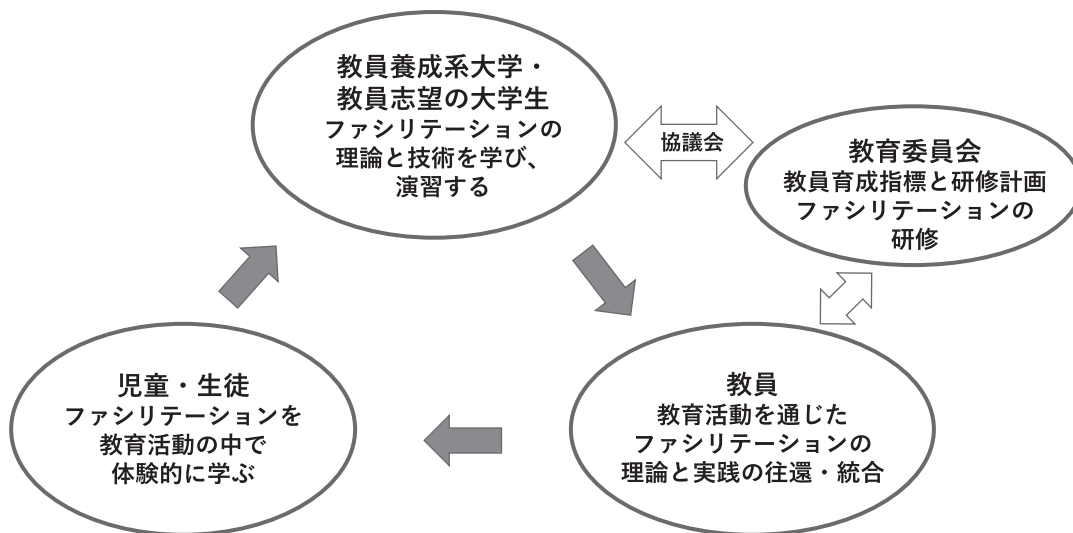


図1. 学校教育でのファシリテーション・サイクル

また令和3年1月26日中教審答申を踏まえ、教師は授業等を通して児童生徒が対話的で協働的な学びを深め、主体的に行動を起こせるようにファシリテーションを導入する工夫が必要であると思う。（図2）

例えば、話し合いを促す技法の一つに「シンク・ペア・シェア」¹⁹⁾がある。これは「一人で考える⇒二人組で相談する⇒全体で共有する」の順序で対話や議論を行うものであり、他者と共有した考えや気づきは、大人数の前で発言する抵抗感や不安を軽減する効果がある。また、「内省的思考や他者と本質的な対話ができる共感の場があると知識創造活動が活性化される」²⁰⁾ため、教師には心理的安全性を確保し、児童生徒が積極的に試行錯誤ができる学びの場を創出するファシリテーションが求められる。

児童生徒が教師の発問や課題に対して一人で考えるように促し、次に二人組で考えや意見を話し合うように促進すると、思考フレームが拡張する。そして二人組で共有した考えや気づき等の情報を、グループや学級全体に共有し、共感できる場や雰囲気を調整するファシリテーションが必要となる。グループや学級全体から相互にフィードバックを受けやすいように促すことで、個人や学級全体の思考フレームが拡張し、知識創造活動が活性化されるのである。まとめや振り返りでは正解や不正解を求めずに、率直に自分の考えを安心して表現できる環境を整えることもファシリテーションであり、多様な考え方や意見を踏まえ、論理的に構造化することで対話的で協働的な学びにつながり、学びが深まると考える。（図2）

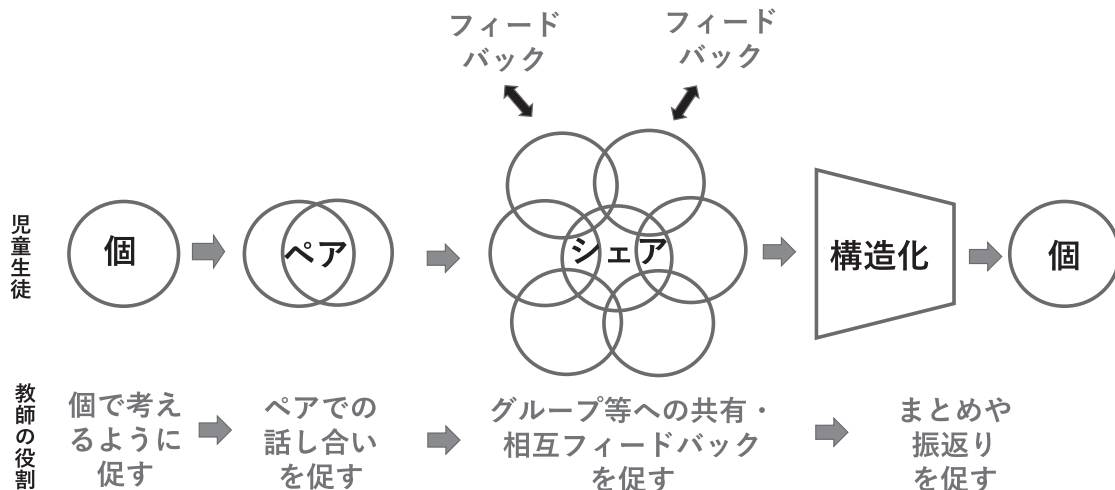


図2. 対話的で協働的な学びを深めるためのファシリテーション

また、学校行事や体験活動等を含む全教育活動の中で、普段の児童生徒の実態や関心を把握し、それから目標設定や動機づけを促し、それを主体的・対話的・協働的に学べるように引き出していくのが教師のファシリテーターとしての役目でもある。さらにその過程での様子や思考を把握し、促しながら事後に応用・転用できるように引き出すことで、実生活への生きた学びや深い学びになるのである。これが「つなげる（つかむ・うながす・ひきだす）支導」²¹⁾である。

7. まとめ

本研究では、令和3年1月26日中教審答申に記された教師に求められるファシリテーション能力に着目した。日本でのファシリテーター・ファシリテーション・ファシリテーション能力に関する文献研究の動向は、ファシリテーション能力の研究と比較するとファシリテーターとファシリテーションに関する研究が顕著に多いことが分かり、ファシリテーション能力の研究は進んでいないともいえる。

また、「ファシリテーター及びファシリテーション」のそれぞれに追加したキーワードでは、「教育」と「大学」が顕著に多いことが分かり、研究しているのは大学での取り組みであると考えられる。「ファシリテーター及びファシリテーション」のそれぞれにキーワード「教員養成」を追加すると、検索件数は合計しても7件のみであり、「ファシリテーション能力 教員養成」では0件であった。

これらの結果から、令和3年1月26日中教審答申で教師に求めるファシリテーション能力の修得及び向上は容易ではないと考えられ、教員養成段階での研究・開発が急務であり、教員養成系の大学では具体的なカリキュラムやプログラム等を示すべきである。

ファシリテーションは、ビジネス、社会活動、自然・環境、社会教育・学校教育等の様々な分野で応用され、定義も多様である。特に21世紀に入った頃からビジネス界でも注目され、日本ではファシリテーションを専門的に研究する大学院も現れ、幅広い分野で応用されている。先行研究からは、ファシリテーションをリーダーシップに含まれる能力として捉えられ、児童生徒が誰かのために行動できるように促すことやそのための環境づくりが教師に求められるファシリテーションでもある。

筆者は、教師に求められるファシリテーション能力の一つとしては、「指導」によるティーチングとファシリテティングとコーチングを合わせた「支導」のバランスを見極め、そのバランスをとりながら児童生徒の状況に合わせて発揮する能力であると考え。この能力は、大学や大学院での教員養成の課程内でファシリテーションについての基礎的な理論と技術を学び、授業内での演習や部活動、インターンシップや教育

ボランティア等においてファシリテーションを試みる経験の積み重ねによって身につくのである。

玉川大学では「TAPリーダー資格」、同大学院では「学級ファシリテーター資格」の取得のための科目が開講されている。これらの学修や経験を基に教師として教壇に立ち、研修等を通じて適切なフィードバックを受け、ファシリテーションの理論と実践を往還・統合することで、教育活動の全般を通じたファシリテーションが可能になるのである。

そうした教師によるファシリテーション・モデル（例：授業での「シンク・ペア・シェア」等、学校行事等での「つなげる（つかむ・うながす・ひきだす）指導」を教育活動の中で児童生徒が体験的に学ぶことで、教師がいない場面でも児童生徒同士がファシリテーターとなり、協働的な学びや主体的・対話的で深い学びにつながっていくことを期待する。

児童生徒が以上の経験や過程を経て、ファシリテーションを学修できる教員養成系の大学に進学し、その理論と技術を学び、ファシリテーターとしての演習を繰り返すことでファシリテーション能力を備えた教師になっていくのである。したがって、こうした学校教育でのファシリテーション・サイクルを整える体制や仕組みが必要である。

【引用文献】

- 1) 中央教育審議会「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して—全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現—」（答申）、3ページ
https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf（2021年4月17日閲覧）
- 2) 前掲書1)、19ページ
- 3) 前掲書1)、18ページ
- 4) 前掲書1)、18ページ
- 5) 前掲書1)、85ページ
- 6) 日本経済団体連合会「Society 5.0に向けて求められる初等中等教育改革 第二次提言—ダイバーシティ & インクルージョンを重視した初等中等教育の実現—」2020年11月17日、10ページ
<https://www.keidanren.or.jp/policy/2020/110.html>（2021年4月17日閲覧）
- 7) 前掲書6)、28ページ
- 8) 中央教育審議会「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について—学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて—」（答申）
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf、7ページ（2021年5月17日閲覧）
- 9) 小峰直史「ファシリテーションで創る学び合う集団づくり」矢野博之編著『特別活動』学文社、2021年、99ページ
- 10) 工藤亘「ファシリテーターの役割についての一考察—玉川アドベンチャープログラムを通して—」玉川大学教育学部紀要『論叢』2010、19ページ
- 11) 工藤亘「リーダーシップ教育に関する一考察—キャリア教育とTAPを視座に—」『玉川大学教師教育リサーチセンター年報』第10号、2020年、39ページ
- 12) 武田正則「ファシリテーター能力の育成のための校内研修モデルの開発—学習促進案（facilitation plan for learning）の提案—」『日本教育情報学会第27回年会論文集』、2011年、47ページ
- 13) 工藤亘「teachers as professionalsとしてのtap—「指導者」から「支導者（ファシリテーター）」へ—」『教育実践学研究』第16号、2012年、38ページ
- 14) 堀公俊『ファシリテーション入門』日本経済新聞出版社、2004年、51-54ページ
- 15) 堀公俊『これからはじめるワークショップ』日本経済新聞出版社、2004年、44-45ページ

-
- 16) 工藤亘編著『アドベンチャーと教育』玉川大学出版部、2020年、37ページ
 - 17) 文部科学省総合教育政策局「教師の資質能力の向上等について」（令和2年11月17日）
https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/jikkoukaigi_wg/syotyutou_wg/dai4/siryou1.pdf 資料1、3ページ（2021年5月10日閲覧）
 - 18) 前掲書14)、192ページ
 - 19) 中井俊樹『アクティブラーニング』玉川大学出版部、2015年、111ページ
 - 20) 工藤亘「目標設定と振り返りへの指導と支導に関する研究—TAPや体験学習での活用を視座に一」、玉川大学教師教育リサーチセンター年報第9号、2019年、63ページ
 - 21) 工藤亘、川本和孝、白山明秀「TAPに求められる教員研修に関する研究—教育委員会からの研修依頼目的と現状に着目して—」玉川大学教師教育リサーチセンター年報第8号、2018年、120ページ